OBI 同窓会 NEWS Letter
お茶の水聖書学院同窓会
2014年1月発行 No. 36
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2－1 OCCビル2F
TEL.03-3296-1005 FAX.03-3296-4641 発行者 世良田 湧侍 編集者 有田 貞一

「聞くたびに感動が増す逸話」

講師 野口 誠

OBI の私の印象は後援者が信仰的で、講師陣が充実し、院生がまじめで、できることである。私の使命は、聖書は一点一角あやまりない神のことばであるという主イエス・キリストの聖書観に基づく弁証法を教えることである。

OBI の講師にしていただき、私にとって幸いなことは、飯島延浩社長の話がじかに聞けるようになったことである。飯島師の OBI での話の中に例外なく必ず出てくる逸話がある。それは、飯島師が、当時 OCC の理事長であった岸田 馨師に OCC への献金を毎年ささげることを申し出たところ、「いらない」とにべもなく断られたので、それを OBI にささげることになったということである。私は、その逸話を聞くたびに新たな感動を覚えるのである。その理由を話させていただく。

飯島師が神に導かれて OCC の理事長に対して聖書的に、かつ信仰的に献金を申し出たことはまちがいない。それなら岸田師は当然それを喜んで受け入れてもよさそうなものである。しかし岸田師はそれを断った。だれもがそれを不可解に思うのは仕方ない。では岸田師が断ったのは、まったく岸田師自身の信仰による決断から出たものなのか。そのはずである。地上生涯の主イエスがそこにいれば、岸田師の断りを聞いて「キシダ・カオル、あなたはさいわいである」といわれたと思う。さらに主は、それに加えて「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」（マタイ 16：17）といわれたのではないかと思う。岸田師のその断りがあったからこそ、いまの OBI の存続があるということもできると思う。OCC へ申し出たその支援献金の神の御旨の行き先は、実は経済的に危機状態にあった OBI だったのである。

モーセは、イスラエルの民を解放するように主からエジプトの王（パロ）のもとにつかわされた。ところがその要求を拒むようにパロの心をかたくなにしたのは神なのである。パロの心がかたくなになったので、モーセの祈りによる十の災害や紅海渡渉の奇跡が起って神の栄光が表されたのである。モーセの要求がパロによってあっさり受け入れられたならば、神のみこころはならなかったのである。飯島師の申し出が、OCC の理事長岸田師によって待っていましたとばかりに受け入れられてしまったならば、OBI を通しての神の栄光は表れなかったと思うのである。

神のしもべヨセフが生ける神の摂理のうちに生かされたように OBI も OCC も共に神の摂理に生かされてきたのである。この度、神の摂理によって両者が同じ屋根の下で統合されることになった。ここで主に示されたことばは「主の家の栄光は、前の栄光よりも大きいと万軍の主は言われる。わたしはこの所、すなわち OBI と OCC に繁栄を与えると、万軍の主は言われる」（ハガイ 2：9）である。主によって OBI の重荷を負わされている私たちは「ヨセフを羊の群れのように導かれる方」（詩 80：1）にその繁栄を祈っていこうではないか。

「母の救い」

石井由紀（19 期生）

「え、お母さん!」母がひょっこり礼拝に来てくれたのは、2011年3月27日でした。2009年4月、私はOBIに入学しました。その2ヶ月後の6月から、神様の導きにより家庭集会が始まりました。やがて礼拝と教会学校も始まり、2010年4月からは、開拓教会として歩んでいました。母は、礼拝に参加した動機を書いています。

「娘が家庭集会を始めた時、応援するつもりで参加しました。(母の手記より)」

それから、母は、時々礼拝に出席するようになりました。

2013年2月11日、キングス・ガーデン神奈川主催のコンサートに、母と行きました。コンサートの後、喫茶店でお茶をしていたとき、母が「私の洗礼はどうしたらいいかな。」と言ったのです。イエス様が母のうちに宿ってくださり、すでに信仰に生きる決心を与えてくださっていたのでした。そして、2013年3月31日イースターに洗礼を受けました。母の受洗は、逗子キリスト教会の初穂となりました。

その年の6月に、母は旅先で左足膝を骨折しました。実家は山の上で階段があるので帰ることができず、旅行先から直接、車椅子に乗ったまま逗子キリスト教会を開いている自宅にたどり着き、約2ヶ月間を過ごすことになりました。ベッドの上でじっとしているしかなかった母は、毎日、朝から晩まで聖書を読み、信仰書を読み、賛美歌を歌い、過ごしました。母のベッドは集会している部屋にありました。礼拝だけではなく、聖書祈り会にも自動的に参加することになりました。

「最初、祈ることができず、ノートに書いたりしていましたが、週一回の祈り会に出るようになり、自然に祈りが出来る様になり、気持も平安、祈り会も楽しみという、この頃です。(母の手記より)」

母が最初に教会学校に行ったのは、6歳のころだったそうです。

「私が六才の頃、肺結核を発病した母が、献金を小さな封筒に入れて『行っておいで』と渡してくれました。…負けず嫌い、人の努力すべき、自分で考え行動する、人をうらやむ、がまんする、こんな生き方で七十になってしまいました。(母の手記より)」

その間、クリスチャンの友人に誘われて教会に行ったこともあったそうです。60年以上の月日がたっていました。神様の導きは計り知れず、母に確実に働いてくださっていました。—天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。(イザヤ55:9)—

「ただただ、今はすべてに感謝、神様イエス様に祈って、私の道を導いていただいていることに、命をいただいていることに、心安らかであることに感謝です。(母の手記より)」OBIとの出会いがなければ、感謝と平安に満ちあふれている今の母の姿はなかったと思います。OBIの諸先生方やスタッフの方々の苦闘の祈りと多大なご労に、そして神様の導きに感謝し、主の御名をあがめます。

「祈りの答え(兄の回心)」

戸川偕生（11 期生）

私には2歳違いの兄がおります。兄は子供のころから勉強が出来、性格も温和であったため親に期待されていました。父親は牧師、母親も神学校で学んだ経歴の持ち主でした。そんな両親ですから兄が将来献身し牧師になることを願っていたと思います。しかし、兄は大学卒業後、献身することなく地方公務員になりました。やがて、公務員は国家公務員でなければならないと思うようになり、国家公務員の上級試験を目指して勉強を始めました。結果、合格し、ほぼ望み通りの官庁に入ることが出来ました。キャリアとしてスタートできたわけです。32歳の時にクリスチャンの方と結婚いたしました。相手は素晴らしい信仰者でした。仕事も私生活も充実し、教会生活も熱心に励んでおりました。

キャリア組は国家を担う者として特別のコースが用意されており、そのひとつに各官庁のキャリアが一堂に会しての研修会があります。ここで各官庁のキャリア同士の横のつながりが出来、お互いのエリート意識が育って行きます。兄は、このキャリアに対する特別扱いにエリート意識が強くなって行きました。兄に会うたびに国家公務員であることを誇り、傲慢になって行くことが感じられました。それに反比例するように、信仰者としての謙遜さが失せて行くことが分かりました。

そんな兄に義姉は悩みました。事あるごとに兄に注意をし、両親にも相談しました。両親も心配し、兄に何度も注意しましたが、兄は全く馬耳東風でした。家族関係にも影響し、子供たちも父親を敬遠し、無視するようになりました。ついには、兄から離婚の話が出るまでに家族関係は悪くなりました。子供たちも母親に離婚を勧めました。しかし、義姉は神の前に誓った結婚であるから別れることはできないと言い、ひたすら耐えて祈り続けました。それは辛く悲しい涙の祈りであったと思います。

そのような状況のまま、兄は定年を迎えました。定年後もエリート意識は収まらず、相変わらず家庭のガンのような存在でした。兄は離婚願望を持ち続けていたため、家庭にいるより別居した方がよいとの判断から、一人住まいを始めました。

5年ぐらい経った頃、兄は体調を崩し、入院して検査をしてみましたら肝硬変の末期になっていることが分かりました。一人での生活が出来なくなったため介護保険施設に入居することになりました。義姉は毎日のように施設に通い兄の看病をいたしました。頻繁に兄の所に通う主な理由は、兄の信仰のことが心配であったからです。私も何度か兄を見舞いました。行くたびに聖書を読み、祈って帰るようにしておりましたが、兄は上の空でした。

施設に入所後、危険な状態が何回かあり、その都度入退院を繰り返しました。肝硬変に加えて肝臓がんも見つかり、認知症も発症していることが分かりました。義姉は必死でした。私も毎日、兄と義姉のために祈りました。

一昨年の11月であったと思いますが、義姉から電話があり「主人が突然変わってしまい、一緒にデボーションを持つようになりました。そして私に今まで苦労をかけて済まないと言ってくれて、子供にも謝りました。」と言うのです。とても信じられませんでした。

昨年3月に兄の所へ参りました。兄は私の顔を見るなり賛美しようと言い、一緒に3曲歌いました。兄は手拍子をして大きな声で歌いました。個室でしたので私も大きな声で歌いました。歌い終わると聖書を読んで欲しいとのことで、Iテサロニケ4章の再臨の個所を読みました。兄は眼を閉じて聞いていました。帰り際に私が祈りますと、そのすぐ後に兄は大きな声で私のために、教会のために祈ってくれました。はじめて聞く兄の心からの祈りでした。涙が出てきました。天国にいる両親に聞かせたい祈りでした。兄は本当に変えられたのです。

今、兄は医者から桜の花は見られないかも知れないと言われています。しかし、兄はそのことを知りながらも平安の中にあります。その兄の様子は、担当医にも「戸川さんを見ていると私がいやされる」と言われるほどです。終りを間近にしていながら痛み苦しみがなく食欲もあるという感謝な状態にあります。

素晴らしい神様の祈りの答えです。御名を心から賛美いたします。

「息子の救い」

有田貞一（3期生）

昨年の6月10日のことです。長男から私たち夫婦に手紙が届きました。中を開くと、「お父さん、お母さんと始まり、最近OCC主催のフライデーナイトに行くようになり、お話しを聞いていると、『あなたが神を愛したのではなく、神があなたを愛したのです。』とのみことばに触れ、涙がどっとあふれ出ました。人ではなく、自分が変わらなければならないのだということに気が付いた」という内容でした。私たち夫婦にとって、まさに青天の霹靂、天にも昇るような喜びに満たされた瞬間でした。こんなすばらしいことが起るなど、だれが予想し得たでしょう。中学生位までは、一緒に教会に行っていたのですが、その後行ったり行かなかったりの状態が続き、9年位前に家を出て千葉県の市原市に住むようになったのですが、たまに帰ってきても礼拝に出たがらない状態でした。そのような息子ががらりと変わり、毎日曜の礼拝、水曜日の祈祷会には欠かさず出席するようになったのです。

そして7月にOCCのフライデーナイトに息子が私たちを誘ってくれたのです。その日はうだるような猛暑でしたが、私たちは心躍る思いで、OCCに出かけ、救われた息子に会い、またOCCの榊原先生にもお会いすることができました。息子はすっかり変わり、平安と喜びに満ちておりました。私たちはイエス様にひれ伏すような気持ちで感謝をささげました。

思わず、「救われし息子に誘われいそいそとうだる暑さも喜びとなる」という一首が浮かびました。神様はこんなことまでしてくださるのだ、という感謝でいっぱいです。その後約半年間にわたって洗礼準備会が持たれ、今年の1月19日に洗礼を受けることになりました。市原の教会の先生が熱心に時間をかけて洗礼準備を指導して下さっておりますことを感謝しております。20歳ころからアトピーがひどくなり、就職もままならず、人生の挫折を味わっていた息子に人生の本当の解決、救いと希望がもたらされたのです。今息子は、社会保険労務士の資格で、非正規国家公務員として総務省千葉支局で働いております。またNPO法人アトピーフリーコムの代表として同じ悩みを持つ人たちの世話活動もしております。（インターネットで検索できますので、開いてみてください。）

「神は、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」（エペソ1:10）息子のために神があらかじめ、創世の時すでに備えてくださっておりますご計画に従って歩んで行くことを私たちはわくわくした気持ちで祈っております。

またこの紙面をお借りしてこの息子の救いのために労し、祈ってくださった多くの方々に心からの感謝をおささげします。

「OBIで学んで」

森井あずさ（8期生）

ＯＢＩとの出会いは、たまたま目にした一般声楽コースのポスターだった。歌が大好きな私の心は強く動いた。一学期だけでもレッスンを受けさせてくださいと祈ったら、ちょうど必要な金額が与えられ、植木朋子先生から発声と賛美歌の歌い方を教えていただいた。本格的な声楽は初めてだったが、とても楽しく信仰的にも恵まれた。

その後も守られて賛美を続けることができた。こうしてＯＢＩに出入りするうちに聖書科の学びにも導かれた。シングルマザーでお金がないのだが、神様はＯＢＩの奨学金を用意してくださり、また週一回の学びの日だけは仕事が入らないようにしてくださった。そして聖書科第八期生として、三年後に無事卒業することができた。

信仰もまだ固まっていないような状態だったのに受け入れていただき、私の信仰は逆にＯＢＩで培われたように思う。全てのクラスが恵みであったが、三年間増田先生のクラスを受講することができ先生の深い信仰とお人柄に触れたことは私の財産になった。また本田弘慈先生の最後の三年間、クラスを取ることができたのも本当に恵みだった。「学んでいるからといって得意になってはいけないよ。かえって謙遜になりなさい。牧師先生のために祈りなさい」という本田先生の声が今も耳に残っている。

聖書科を卒業すれば何か変わるのかしら、と思っていたが、実は何も変わらなかった。献身したつもりだったので少し拍子抜けがしてしまった。しかし神様のご計画はそれだけではなかったのだろう。その後ずいぶん経ってから私は人前で本格的に歌を歌うようになり、あちこちの教会から声をかけていただいて賛美のご奉仕もするようになった。植木先生に教えていただいたことが、今、形になっている。

現在、ＢＳＦ（Bible Study Fellowship-「聖書の学びの交わり」）という英語の学びに通っているが、自分でも信じられないことながら、英語のメッセージを日本語で聞きたい人のために同時通訳のご奉仕までしている。教会ではオルガン奏楽をさせていただいている。どんなご奉仕をする時も、ＯＢＩで学んだ信仰と精神が生かされていると感じる。

信徒として、今あるところで主に仕える、というのはこういうことなのかな、と思う。これからまたどのような道に導かれるかわからないけれど、ＯＢＩの卒業生であることはいつまでも私の誇りであり、ＯＢＩで学んだ信仰と賛美とはいつまでも私の宝物である。その宝をさらに増やして生かしていただけるように、これからも希望をもって主に委ねて歩んでいきたい。

「金沢の高い文化とキリシタン探訪」

中島總一郎（13期生）

金沢城公園の石川門

金沢の聖霊修道会の聖霊堂

2007年前期研究科の「迫害と殉教の歴史」を機に、同年9月に長崎、大村、生月島、平戸島を実地見学し、翌2008年には五島、島原、天草を訪れた。その第3回目の旅として、今回（2013年9月30日～10月2日）は後援会主催16名で北陸金沢へ出掛けた。兼六園などの観光と共に、高山右近やキリシタンの足跡を確認した。

三日間とも同盟基督教団の教師であり、自費で研究成果のギャラリー・ジェストを開館し、観光ガイド「まいどさん」でもある奈良献児師に、米田由起子姉の取りはからいで案内をお願いした。

金沢城公園では、右近の貢献が残る三十間長屋（武器弾薬、食糧庫）、石川門、菱櫓など、城下では右近の屋敷跡、彼が構築指導した惣構（外堀）などを見た。兼六園は日本三名園の一つだけあって、よく整備され天候にも恵まれ、風光明媚そのものであった。カトリック金沢教会では踏絵や墓石、冠に十字を彫って偽装された聖像代りの菅原道真像（前田家先祖で尊敬されていながら迫害で流刑された）などの苦難を垣間見た。

ひがし茶屋街においては、加賀藩が徳川幕府へ謀反を起こす気がないことを示すために文化に力を入れたが、その跡としての伝統美術工芸を体感し、懐華樓では抹茶と和菓子を堪能した。今も残る武家屋敷の日本庭園や松を両脇に構えた瓦門、土塀にも武士の心意気を感じ魅了された。また現代に戻っての近江町市場は魚介類や野菜が溢れ、活気に満ち、人々の腹口を支えていた。

高山右近はキリシタン大名であったが、1587年の秀吉による「伴天連追放令」を機に、信仰を守るために大名を捨て、翌年に加賀百万石初代藩主前田利家の招きに、南蛮寺（教会）建立を条件に客将として家族、部下共々に来た。右近は26年間の在沢中に、城の修築、造築、惣構構築などの土木建築、千利休から「極上一の弟子」と言われ「利休七哲人」のひとりに数えられるほど茶道に注身した。右近にとって茶室は静まる「小さな聖堂」であった。治部煮、金華糖などの食文化にも貢献している。彼は生涯にわたってこれらの文化興隆だけでなく、常駐の宣教師を招いての布教にも身を挺し、キリシタン武将や信徒を多く誕生させた。彼は1614年のキリシタン禁止令によって追放され、長崎からマニラへ行き、そこで到着後40日目に病にかかって昇天した。

1870年に浦上四番崩れのキリシタン3,394人のうち516人が改名後の金沢藩に預けられ、卯辰山養生所や織屋などに幽閉された。取扱いは過酷で、改宗拷問と飢餓などで多くの殉教者を出した。この事情が藩に招かれていた外国語教師によって1872年に告発され、外交支障をきたした明治政府は、翌1873年（明治6年）にキリシタン禁制の高札を降ろした。

編集後記

2014年度（第19回）OBI同窓会のお知らせ！

2014年5月19日（月）11時～14時、OBI同窓会を開催しますので、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。
詳細は、別途ご連絡します。

OBI同窓会ニュースレター36号をお届けします。今回は2009年から、教鞭を取ってこられた聖書原典講読の講師野口誠先生に巻頭言をお願いしました。また音楽科の学びの証しを森井あずさ姉にお願いしました。そして昨秋後援会主催の金沢旅行記を中島總一郎兄に書いていただきました。そして今回、最近体験した家族の方の救いや信仰回復の証しを、3人の方にお願いしました。他にも身近な方の救いを経験された方もおられると思いますが、情報入手の範囲が限られておりますため、不手際があったのではと思っております。他にも同様の良き知らせがありましたら、次号以降にも続けて掲載したいと思っておりますので、お知らせください。